



自宅敷地内の作業場で花こう岩を磨く弘一。ラジオで音楽を聞きながら、農閑期には朝から夕方まで石に向かう。制作中の作品は「ドングリの国」



コンバインは中古。5年前にご近所と共同購入した。稲刈り初日に故障したが、腕ききの修理マンが駆け付け、快調に動いた＝9月2日

## 土も石も、生きる根っこに

稲わらの香りに包まれて、羽越線沿いの国道を北へと向かう。

右手に五頭山を眺めながら、田んぼに囲まれた道を何度か曲がると、大きな彫刻が見えてくる。弘一の3作品である。表紙の写真はそのうちの二つ。

黄金色のじゅうたん、秋の日に黒光りするアート。地元ではなじみの景色だが、初めての人はみな驚く。私もそうだった。

コメを作り、石を彫る。そういう人がいるんだと知ったのは10年ほど前である。

難問山積の農業について、生産現場の生の声を聞きたい。知人から紹介されて自宅を訪ねたら、敷地内いっぱい石彫作品が並んでいた。

人の背丈ほどのものから、握りこぶしぐらいのものまで。これが農家か。度肝を抜かれた。

イキモノのような、やわらかさと体温を感じさせる不思議な造形。今にも動き出しそうな気配を漂わせている。

あの時は、コメの話もそこそこに、石の話を聞いたことを覚えている。

田んぼは2・6畝。笹神では中規模のコメ専業農家である。

「できるだけ安全で安心なコメを」と地域を挙げて取り組んでいる中で、

## 出稼ぎ帰りに涙「いつかは」

二人の前史を凝縮すると――

「何もなない笹神が嫌で」東京に飛び出した農家の長男は、生花の卸会社をさっさと辞め、美術学校に通いだす。絵の基礎から彫刻へ。もちろん仕送りなしのアルバイト生活だ。

志は膨らむ。大理石を彫りたい。後に妻となる理恵子を伴っての渡航を決意。スペインでの語学研修を経てイタリアで彫刻修業を始めた。

ところが、彫刻家の卵が集まるカラーラの工房で問われた。「なぜ、ここにいるのか」。ギリシャやローマの古

弘一も率先して、農業や化学肥料を減らす努力を重ねてきた。

働き手は夫婦だけである。かける手間暇は半端ではないはずだが、同時に石彫も続けているのはなぜなのか。

それは二人にとって、土も石も、生きていく根っこのところから切り離せない存在だからなのだった。

典作品を生んだ地にあつて、日本文化を知らない自分に気付かされた。

資金が底を突き東京に戻った。すると、父親から「戻れ」の便りが届く。

1980年代の半ば。農業は大規模化の渦中にあつた。機械や肥料の経費が膨らむ割には収入は伸びない。大きな赤字に父も苦悶していた。

帰郷を受け入れた。出稼ぎや長距離トラックの運転手として睡眠を削り、実家の立て直しを図る。

当然のことながら彫刻をする余裕が

ない。気持ちに封印をした。

「あきらめたわけではない。できないだけ。いつかはやってやる」とは思っていたが、出稼ぎの折にのぞいた展覧会の帰り道、涙が出た。

「俺は何をやっているんだ」。それでも屈しなかったのは、「この人がいたから」。

この人とは妻。東京人である。所属していた劇団を「集団と個の関係が納得できずに」退団したころ、弘一と出会った。二人に共通するのは、私の見たところ、信念を曲げない頑固なところだろう。まるで石のようだ。そんな二人がタッグを組めば、道は開ける。

父親から経営を引き継ぎ、赤字解消の展望が見えてきた。再び石に向き合う時がやってきた。

「いつかはやってやる」が形になったのが1991年。加茂市の「加茂山彫刻展」のコンペで、全国からの応募約200点の中から佳作に選ばれた。

土と石の二足のわらじ生活はこうして始まり、現在に至るのである。